

B班調査箇所 調査日：2024年11月16日～2024年11月18日

5. 対象箇所概要

① 輪島市大久保地区

今回の地震では最大規模の地すべりが発生した地区である。令和6年1月1日の地震後と、令和6年9月21日の豪雨後の写真を比べると、豪雨後に地すべりの明瞭な拡大は認められない（写真1）。

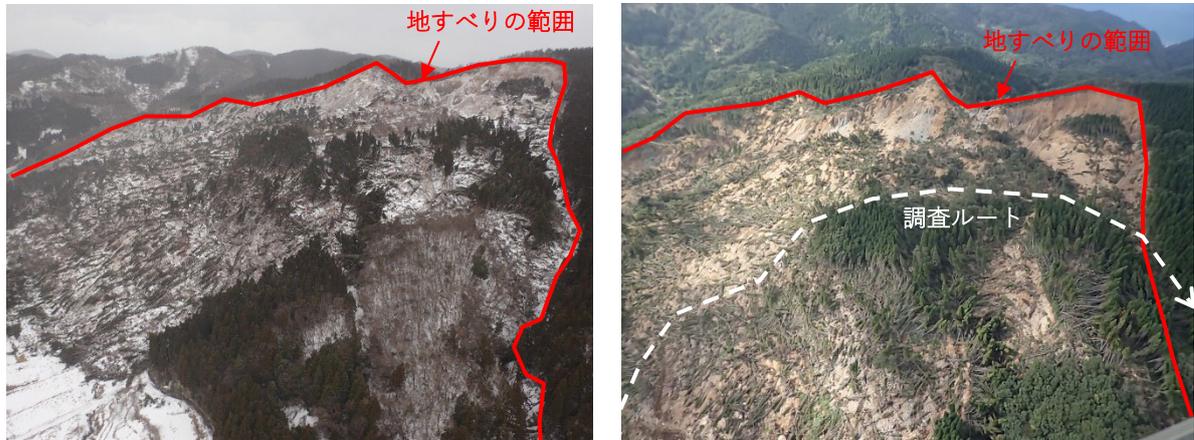


写真1 大久保地区全景

左：令和6年2月2日撮影、右：令和6年10月9日撮影

山腹斜面には、地すべりによって上流から流下堆積したと考えられる岩塊が確認される。岩塊は主として珪質シルト岩（海緑石砂岩を含む）からなり、大久保地区を構成する基盤岩と推察される。なお、海緑石砂岩は5万分の1地質図幅（吉川他、2002）では、大久保地区には見られないが、本調査では岩相から岩塊の上部を海緑石砂岩と判定した。大久保地区での海緑石砂岩の分布状況については、詳細な検討が必要である。



写真2 山腹斜面に見られる岩塊

地すべり頭部付近では、立木の傾倒（後方回転、ロールオーバー）が確認される。立木の後方回転は地すべり土塊の回転運動によって発生することから、頭部付近は円弧すべりであった可能性が考えられる。

大久保地区では現在ボーリング調査が行われており、今後詳細な地すべり発生機構の解明が期待される。

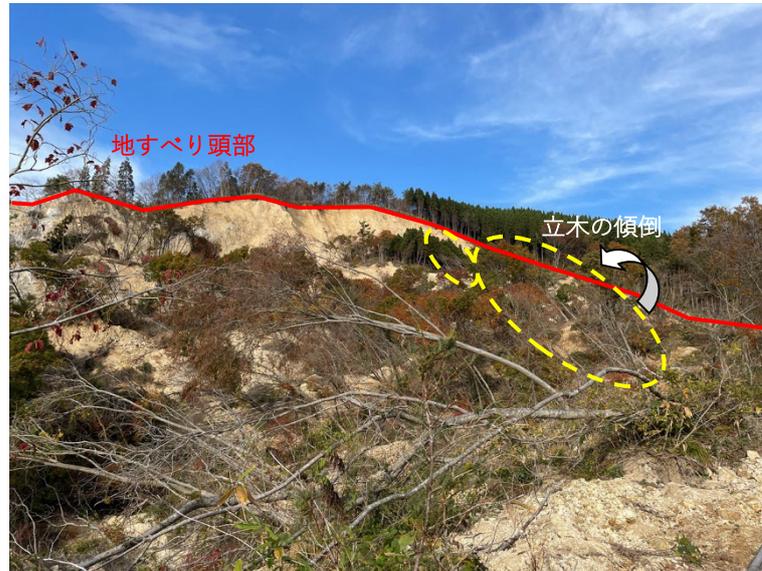


写真 3 頭部付近に見られる立木の傾倒

②輪島市名舟地区

名舟海岸の地質は飯塚層 砂質泥岩・砂質砂岩 (Is; 吉川他, 2002) や珪質シルト岩 (Ip; 吉川他, 2002) が分布しており、本地区では珪質シルト岩が広く分布していると推察される。

能登半島北東部の海岸において、山地の配列は北東-南西で、山地配列に沿って褶曲構造が発達している。このため、地層の傾斜は北西や南東方向になり、本地区では北西方向の傾斜が見られる。



写真 4 側端の珪質シルトと地層の傾斜

典型的な地すべりブロックであり、明瞭な滑落崖があり、幅 120m・高さ 70m の移動体は土塊の下部にあった国道を巻き込み、海側 50m ほどまで達している。



写真 5 踏査時の地すべりブロック状況

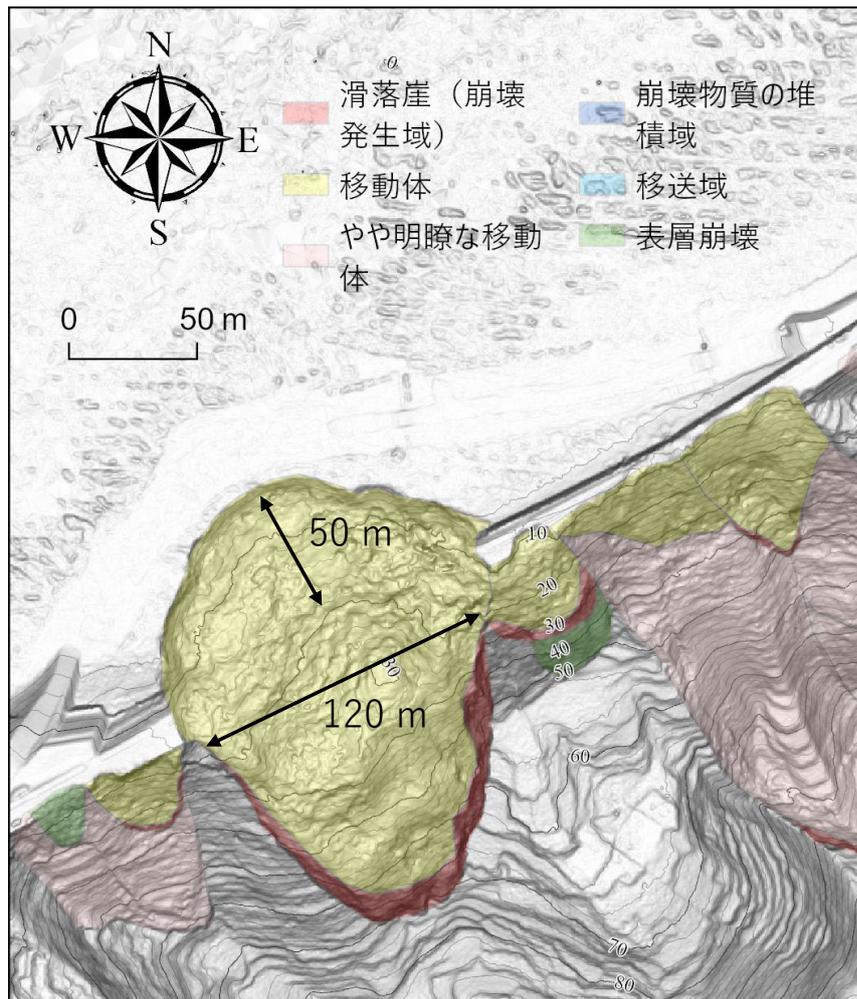


図1 名舟地区の令和6年能登半島地震後の地形判読図（インベントリ部会作成図に加筆）

現在道路部は、地震後に海側に隆起した個所に盛土して、仮設道路を建設している。

③輪島市町野町上田長地区

町野町上田長地区の天笠山（てんがいやま；234.9m）の東斜面では、2024年1月の地震によって、数100mの規模の地すべりが2か所で発生した。いずれの地すべりも地震前から明瞭な滑落崖と思われる弧状の急崖に囲まれた斜面で発生していることから、旧地すべり地形の地震による再活動と考えられる。これらの地すべりによって、下流の金蔵川の氾濫原に土砂が流出して民家や道路に大きな被害を与えたため、その復旧作業が行われていたが、2024年9月の豪雨によって、これらの地すべり土塊の末端部が侵食を受けて再び大量の土砂が流出した（写真6）。B班は2024年11月17日に南側の地すべり土塊末端部の観察を行った。地すべり末端部の露頭では珪質シルト岩を母材とする角礫層の下位に、比較的風化度が低い珪質シルト岩が見られた（写真7）。両者の境界からは地下水が湧出しており、この境界部が地すべりの発生に影響を与えたことが推定された。



写真6 町野町上田長地区で発生した地すべりからの土砂流出

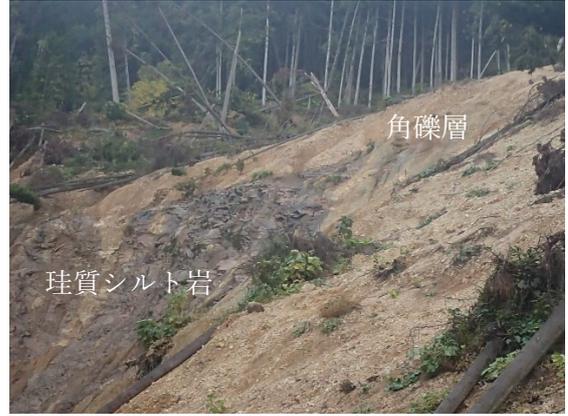


写真7 地すべり土塊末端部に見られる角礫層とその下位の珪質シルト岩

引用文献

吉川敏之・鹿野和彦・柳沢幸夫・駒澤正央・上嶋正人・木川栄一（2002）「地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）珠洲岬, 能登飯田及び宝立山地域の地質」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.